

巻頭言 当研究センターの元所長（現顧問）である 野原 敏雄 さんが、この度『友愛と現代社会』を上梓されました。巻頭言として寄稿いただきました。

私が「友愛と協同社会」を 展望できなかったのは何故か

研究センター顧問（元センター長） 野原 敏雄

友愛は論じたが・・・



先ごろ『友愛と現代社会』と題する本を出版した。「友愛を論じよう」と思ってからすでに20年余、80歳を超えた今やどこまで来たかとの感慨が湧いてくることは確かだが、しかしまだ道半ばだというもう1つの想いが胸中を重くする。20年前に構想した『友愛と協同社会』が書けなかったからである。

今度出版した本の帯封に、「〈自由〉〈平等〉〈友愛〉」を掲げたフランス人権宣言から220年余、社会理念の再創造が迫られる現代に、いま提示される〈友愛〉の人間原理。4つの実話に基づ

き、グローバリズムを突き崩す友愛集団の可能性を提示する」とあるのは、もちろん編集者のキャッチコピーであるが、〈友愛〉を人権宣言に掲げ、憲法にもりこんだのは二月革命だから、160年余りとすべき以外は、私の執筆意図をびたりと言い尽くしており、さすがと感心もし、ともかくそれをなしたことに満足はしている。しかし同時に強い心残り、あるいは残念ともいった情感が心中に漂っていることも白状せねばならない。友愛に基づく社会を論じながら協同・協同組合をほとんど位置づけられなかったからである。暗示的には示したが、強くは言及しなかった、否、言及できなかったというべきである。

そもそも私が〈友愛〉に強い関心をもったのは、協同組合の価値論議にかかわってであった。それまで長年にわたって、世界の協同組合運動をリードしてきたヨーロッパの消費者協同組合が低迷するなか、ICA（国際協同組合同盟）が「レイドロウ報告」を発展させるべく、協同組合の基本的価値の論議を提起し、それを成長著しかった日本で開催される1992年の東京大会の主要議題とし、当時のマルコスICA会長自身が価値論議の基本テーマとして「参加、民主主義、誠実、他への配慮」を提起して、それをめぐる論議が盛んだった80年代最後期に、めいきん生協から「90年代のめいきんビジョン」作成を委嘱された私は、岐阜大の有本先生や当時福祉大の金持先生らとチームを組んで、本格的に協同組合の研究に実を入れていた。

たまたま1989年のフランス革命200周年の行事が華々しく開かれていた折、愛知の平和団体によるパリ訪問旅行に定員埋めのメンバーに加わったが、一行に現職の衆議院議員の田中美智子さんがいたため、気楽な観光の旅の間に若干の「公式行事」が組まれ、私が参加したのはパリ郊外のレジスタント運動で著名なイブリー市での歓迎式典だった。その会場となった立派な市庁舎の正面の壁にリベリテ、エガリテ、フラタニテの見事な文字が大きく彫りこまれていた印象はいまだに消えていないが、もっと心を打ったのは、式典後の晩さん会で同席した元レジスタンス活動家とのフランス語交りの英語での会話で、フラタニテ（友愛）が日常の語として出てきたことで、人権原理が生活語として生きていることだった。そして、「協同の基底に友愛がある」と直感した。帰国してまなしに開かれためいきん生協主催で稲武町の廃校となっていた小学校での協同組合の価値を論議するシンポジウムでその話をし、その解明が今後の私の仕事だと発言した。以後そのことは私の脳裏を離れなかった。

自由と平等は友愛を介して両立する

この理論化の作業は当初の思いとは違って、簡単ではなかった。友愛は文学や哲学の分野ほどには社会科学の概念として論じられてこなかった。人権原理として、自由や平等についての研究の蓄積と比べて、友愛の検討はほとんど皆無といってもよかった。この種の仕事は調査した現地の実態を踏まえ、その内容や意義を理論づけるのが専門の地理学の研究方法になじんできた私にはまったく不得意のもので、戸惑い、悩み、できれば放棄したいテーマとなり、もともと不学も重なって、いたずらな時日を過ごした。多分に感性にかかわる友愛概念を理解するために、いくつもの社会思想史のほか、まったく馴染んだこともない人類進化の理論や人間生理学的な文献もいくつか読みあさったが、課題解明の糸口はなかなか見つからなかった。徒労とも思われる長い日々のなか、偶然にも2つの糸口が見つかった。1つはA. スミスの『道徳感情論』で、自由な競争は最も親しい友人たちの共感ではなく、最も友愛の薄い人々からの共感が得られてはじめて社会的に許容されるといった趣旨の指摘だった。この部分は同書の初版で展開される議論で、2版以後（死の直前の6版まで）は自己の良心と他者たる世論との関係へと書き直される。私はその初版の友愛関係が希薄化すればするほど自由は社会的に許容されるとも読める文脈に注目した。このことは観点を変えて言えば、友愛は自由のもつ格差という反社会的性格を限定できるということだと気付いたのである。

もう1つは認知心理学の「アージ理論」（あえて訳せ



ば「衝動理論」か）に基づく議論で、私の理解では人類が生物学的なヒトから社会的な人となり、類的存在となる十数万年にも及ぶ進化の過程で生存し続けるために獲得した利己的な遺伝子とならんで、同じ意味に必要な仲間を助け集団として生きるために必要な利他的遺伝子が、それを必ずしも必要としなくなったただか数千年来の文明化の短期間には変更されることなく持続して受け継がれ、友愛感情を刺激して無制限な自由を制約し、平等につながる利他行動を引き起こすといったものであった。ただこの利他的なアージは小集団の中でこそ発動されるという理論的限定もあるが、時として巨大なムードを引き起こし、社会を動かすエネルギーをもつことを知った。そのことは、1848年のフランス二月革命という歴史的事実を裏づけるものとして論証でき、当時盛んであった社会主義思潮に影響され、友愛が自由、平等と並ぶ原理としてフランス憲法に明記され、それがその後も社会的役割を果たして現代につながるという論議が展開できた。さらなる詳細は拙著で検討いただきたいが、この部分については、いささかだがこの分野での社会的理論の蓄積に貢献しえるのではないかと自負したい思いがあり、さらに、友愛、つまり人と人の深い信頼に発する仲間関係の重要性を論じるこの種の著作をできるだけ多く世に問うことが、「孤立・無援社会」とも「閉塞社会」ともいわれる現代を打開する議論を盛行する一助ともなるかと思い、当初の構想の半ばでまとめて今回の出版を決める一つの動機となった。

今、協同を論じあうにあたっての中心の問題は何か



拙著の中で紹介した4つの友愛グループ物語では、どれも当初はただか10数人の日常の交際で生まれ、強い信頼で結ばれた人々が共通の社会的ミッション（農、福祉、エネルギー、文化）に取組み、周りに数百人もの援助・協力者を得て広がり、持続的に活動を展開している。そうした小グループでの活動の成功物語は意識して探せばいくつでもあろう。しかし、それらは折々の世間の話題になるかもしれないが、社会的な仕組み、さらには人権原理に根ざした制度として認められるほどに

はなりにくい。アージ理論のもつ生理学的に規制された小集団の限界である。だから友愛原理を社会的に確立させていくプロセスを推し進める組織・制度が論理的にも実際的にも必要である。理論的な正しさを掲げて連帯を強調すれば、友愛の関係は希薄となり、連帯の持続は強権頼りに変わってしまう歴史的事例は幾らでもある。そこでは自由は抑圧され、平等は歪められる。

友愛原理を生かしながら大きな連帯を成り立たせるものは何かという課題を考えた時、協同理念を体現した

組織、「協同組合」がすぐに念頭に浮かんだが、そう言い切る自信が私にはなかった。だから、冒頭の心残りのまま筆を擱いた。1980年のレイドロウ報告以後1995年のICAマンチェスター大会までの間、協同組合が友愛＝協同による自由と平等社会の担い手にふさわしいものであることは、理念としてはまったく疑いないが、それを実現する実践活動での確信こそがここでは問題だったのである。ICA東京大会で承認されたバーク報告の作成に協力された当時日本生協連の対外担当理事だった故大谷正夫さんは自らの生協人生の思索をまとめた大著『協同組合の持続可能な発展を願って』の中に、『生活協同組合研究』誌に寄稿された自著論文「〈基本的価値〉を実践論へ」を組み込んでおられるが、価値

論議を研究者のものでなく、組合員の立場で整理し、マネジャーを含めた生協関係者みんなの実践につながるものとするに腐心したことが語られている。そうした認識にしたがって、協同組合の組合員、専従職員、マネジャーらすべての協同組合の関係者によるそのための努力がなされているには違いない。しかし残念ながら私は宣言された価値を実現しているとか、それに向けて確実にアプローチがなされているといった心証を得る情報はもち得ていなかった。もしそれを見過ごしているとすれば、わが不明を恥じるしかない。来たる国連・国際協同組合年を新たな機として、価値を実体化する実践がさらに意識的に取組まれ、多くのすぐれた経験の情報に接することができることを願うや切である。

幻のエピローグとしての夢

また拙著に係わることで恐縮だが、その裏話でこの小稿をペらせてほしい。私の完成できなかった『友愛と協同社会』のエピローグは「協同社会の夢」を夢想していた。

私がレイドロウ報告に出会ってからもう30年近くになるが、読後感の衝撃は今も新鮮である。その最たる部分は、第V章の3「保全者社会のための協同組合」で、その末尾に「豊かで飽食の社会においては、消費者協同組合はいかに人目を引くような販売をしているかによって評価されるかもしれない。しかし、それほど贅沢でない健全な社会にあっては、消費者協同組合は何を売らないかということによっても評価されよう。」の1行である。それはおそらくロッチデールを成功させた「混ぜ物は売らない、掛け値はしない、掛け売りはしない」で、真正な商業活動を始め、時代の先頭を走ったことに匹敵する見解ではなかったか。だからこそ彼は「協同組合地域社会」を実現可能なものとして描くことができた。しかしそれから30年を経て、協同組合を取り巻く事情は一変している。協同組合が確実に広がり、社会的プランニングがより権威をもつという確信は今ではまったくない。経済のグローバル化が極致に達し、地球環境が危ういといわれる現代状況のなかで、協同組合が時代の先頭に立ちうる条件は狭い。

拙著で4つの小グループの実話を紹介しながら脳裏に浮かんできたのは、①もし環境負荷を含みこんだ価格体系で商品の売買が成り立つならば、日本の農業は十分成り立つ。TPPは撥ね返せる。②もし発送電分離がなされ、自然資源の協同発電の電気が広く普及すれば、脱原発は可能だ。③ワーカーズによる福祉事業がもっと拡大して福祉政策を変える力をもてば、労働環境を含めて福祉状況は大きく改善できる。高齢社会は幸福社会だ。④それらを成り立たせる協同文化を醸成させる。感性豊かな協同文化は基底なのだ。「幻のわがエピローグの夢」である。

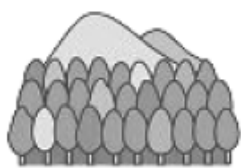


『友愛と現代社会』
持続可能な社会の基底を
求めて

出版：風媒社
¥1,600(税別)

第8回三河地域懇談会発

三河の地域からくらしを考える



三河地域懇談会は、今年で8回目の開催となりました。秋晴れの10月1日(土)岡崎市勤労文化センターでの本企画と、その夜から翌2日(日)にオプション企画にあわせて40名の方の参加がありました。

今年は国際森林年ということもあり、基調講演Ⅰを、奥三河ビジョンフォーラム嘱託研究員の高橋啓さんにお願ひしました。テーマは「流域の森を守る取り組み」です。基調講演Ⅱは、豊田市の職員で「とよた五平餅学会」学芸員の天野博之さんの「豊田市足助町の町並保存の取り組みと五平餅でのまちおこし」です。概要を紹介させていただきます。

基調講演Ⅰ 「流域の森を守る取り組み」 高橋 啓（あきら）さん

＊ 水源基金・森づくり税を知っていますか

今、森がどうにかなっていると心配し、関心を持つ方が増えています。しかし、実際の山がどうなっているかは、あまり知られていません。

まずは、下流域に住んでいる人たちに、上流への関心を持ってほしいと思います。現地で調べるのがいちばん早道です。豊川には、「水源基金」というものがあります。2005年から、流域の9自治体で水道料金1トンあたり1円が拠出され、年間では約7千万円になっています。当時は話題になりましたが、ほとんどの人が忘れているのではないのでしょうか。林業に携わっている人間としては、説明責任があると思っています。

愛知県にお住まいの方は年間500円、「愛知の森づくり税」を払っていますが、ご存知ですか。説明されたこと、ありますか。その税事業で間伐をしています。

森林ボランティアや、地域問題に関わっている研究者と話をする機会が少ないので、ネットワークづくりをしながら、壁を埋める作業をしてきました。山を持っている人、住んでいる人と、下流域の人の森への認識のギャップが大きいと感じています。町に住んでいる人間は森を資産と考えます。下流域の人は、資産と考えず、環境と考えます。そのギャップをどう埋めるか。山を受け継いだ人も、山に住んでいる人も、最近は山へ行っていない。「不在山主」という問題もあります。裏山へ行ってみて驚いた人もいます。「こんなはずじゃ・・・。」と。

＊ 森の健康診断

2006年から昨年まで、森の健康診断を5回行いました。11月の第一日曜日に、朝9時から夕方4時までかけて行きます。対象地は、東三河流域全域で約1万ha、調査地点は87、参加人数は延べ300名でした。参加者は300名の一般の方です。初め参加するときは、杉・桧の区別もつかないのですが、帰りには「あれはだめだね」「これ、いいじゃん」という話ができるようになります。カルテを読みながら、素人でも結果が出るようになっていきます。結果として、東三河の7割以上、ほぼ8割の人工林が手入れ不足ということがわかりました。樹木が過密、超過密という森林が多くなっています。

実は、こういう資料が今までなかったのです。森林がどうなっているか、行政は把握していません。素人が結果を出したことはよかったと思います。



2008年の台風18号のあと(左) 2011年の台風15号のあと(右)

3年前の台風18号のとき、奥三河は4日ほど停電していました。その後、森林組合が木を切って整理をしましたが、山主が見つからず放置したところが根っこが腐り、今年の台風で山がひとつ落ちてしまいました。手入れが行き届かなかったり、経済的な問題だったり、奥三河や西三河でも被害がありました。そういう情報が、みなさんの耳に届かない状況になっています。

＊ 流域の森の課題

東三河の6割が森林、その8割の1万haをスギ・ヒノキが占めています。森林は所有境界によって分けられ、その数は9万4千筆にのぼりますが、その約8割は3ha以下の小さな山です。300haあると、伐って植えて、順番にまわせますが、3haでは伐ったら終わりで、経済的に成り立つ面積ではありません。ほぼあきらめている状況といえます。

もうひとつは、流域の森林の公益性です。全体を調査した森の健康診断によると、面積の7割以上は手入れ不足により、公益的機能を減じている可能性が高く、土砂流失の可能性も高くなっています。

森林所有者の動向は、1980年代以降の長期にわたる国産木材価格の低迷により、山主が森林の「資産価値」を見いだせなくなっています。森林に対して、考えるの

もイヤと言う人が多くなっています。これは西三河も同じです。森林ボランティアが手伝いたいと言っても、「やってほしくない」というのが正直な心情です。さらに、森林所有者の世代交代、山間部の過疎化に伴い、自らの所有山林の場所や内容(何が生えているか、植えるか、植えない方がいいかなど)がわからない素人山主が増加し、森林所有者の山離れはさらに進行しつつあります。平成17年当時で、不在山主の率は北設楽郡平均50%。新城市45%ですが、いまはもっと増えています。70%くらいになっていると思われます。行政では、環境価値(=公益的機能)の増進を目的に、森づくり税で間伐事業を行っていますが、実際は現状の把握もされていないような状況です。

❁ 東三河の森林が抱える問題

以上の状況をどう考えればよいでしょうか。

ひとつは、森林情報管理の問題があります。森の健康診断で、素人が山に入り調査をしたところ、7～8割がダメと結論を出しました。行政では出せなかったことです。きちんとした情報を行政は持っていません。森林の境界や内容、施業履歴等の森林情報(山がどこにあるか、何が生えていて、何年前に植えられて、間伐されたか)がきちんと管理されていないことが問題です。法務局や市町村、愛知県などにバラバラに、しかも不正確な内容で管理されているのが実態です。個人情報保護法にも阻まれています。より精度の高い森林整備、活用計画立案や事業実施評価に役立てづらくなっています。

次に、森林情報活用の問題があります。森林経営を行う材料として、森林所有者、または山崩れ・獣害等の災害を被る集落・行政区地域が、森林情報を活用するのが困難で、その活用支援体制も整っていないことです。

また、森林公益資源を媒介とした他地域との関係の問題もあります。まさに、みなさんとの関係とも言えます。みなさんは、税金を払っている。私はそれで間伐をしているという関係です。払っているみなさんにきちんと説明がされていないのが現状です。水源涵養機能を享受する上下流域地域、さらに「あいち森と緑づくり税事業」をはじめとする、より広域的な都市・地方地域間で、実行性と透明性の高い森林整備に関する「より公正な」地域連携の仕組みが確立されていないことです。

❁ 流域の森の健康診断の課題

流域の森の健康診断の課題としては次の2点が挙げられます。



第1分科会

1つ目に、広域森林の概観把握はできましたが、それを広域～個別森林整備にどう結びつけるかということです。どのように森林

保全・整備を行うのか、だれが(だれと)森林保全・整備を行うかは、経済林なのか、獣が棲む山なのかということでも違いますし、地形によっても違います。

2つ目に、個別森林環境整備が妨げられている原因をどう解決するのかということです。山主・集落の意識を森林保全に向けたためにはどうしたらよいのか。どのような手法があるか、判断をどうするかということです。山主がやればよいというのですが、みんな素人です。ですから、森林組合や森林ボランティアと一緒にやる方向です。やる気があっても、山にアプローチできない状況をどう解決するかということもあります。山がどこにあるか、何が生えているかがわからない状況は、行政がデータを整備することも必要ですが、山主と集落の意識を、森林保全・森林活用に向けたことが大事だと思います。

❁ 今後に向けて

広域地域での対応としては、森林活用・整備の全体計画の作成・実施を行います。そのために、地理情報システム(GIS)等を活用し、事業のPDCAサイクルを動かし、精度の高い活動にしていきます。

生活圏(集落・行政区)への対応としては、山林を集落の資産として保全することです。

まちづくりを主眼において、自立した地域づくりについて自分たちで考えてアクションを起こせることにつなげないと意味がないと思います。

高知で始められた「木の駅プロジェクト」というのがあります。いま鳳来版を準備中です。地域の森林の価値を、地域の住民で作り出す事業です。森林整備で発生した、林地残材活用を通じて、地域の活性化を試みます。例えば、間伐後放置された木材を搬出し、その出荷量に対応して、生活圏(地元商店街・温泉施設)でしか使えない地域通貨(例:モリ、6000円/t相当)を得ます。集荷された木材は、県内チップ業者・地元木材加工業者その他に販売されるというシステムです。

個人への対応、所有山林の経営への対応として、「豊川森のデザイン講座」と「とよがわ森林探偵事務所」を開業しています。人材育成のための取り組みです。

健康診断を行い、評価し、計画をたてて、山主さんにOKをもらったら間伐を実施します。地域と山主、林業事業体と連携した森林保全のきっかけづくりにしようと考えたことです。腕と頭を備えた「森の繕い手」を育てることを目的としています。

森林探偵事務所は、行政とつながりながら、小規模山主支援のための森林境界データの収集や森林価値評価手法の収集・試験を行います。情報交換・勉強会も開催しながら、森を生かした地域間連携の提言も行っています。

今後は、上下流がお互いに明確な責任関係の下で行われる流域森林整備の在り方を明示したいと考えています。地域連携のあり方が重要だと考えています。

基調講演Ⅱ 「豊田市足助町の町並保存の取り組みと五平餅でのまちおこし」 天野博之さん**◆◆ 地域への視点 ◆◆**

豊田市の足助の山も弱っていて、元気がありません。竹が多く、足助の集落は禿げ山が多くなっています。豊田市の森林課は足助支所の中であって、がんばっています。本日は、伝統的建造物と景観を生かしたまちづくりについてお話しさせていただきます。

まずは地域への視点です。私は豊田市の職員です。足助支所に異動になって3年になります。その前は文化財課にいました。実は私は、考古学を専攻していて、学芸員の資格も持っています。近代化遺産をどう活用、保存するかという仕事をしていました。その延長上で町並み保存に関わり、なぜか五平餅にも関わったというわけです。

現在は地域振興担当で、観光・まちづくりの部署にあります。私の今日の話はその一面で、まちづくりは多面体だと思っています。文化財を保存する、博物館入りさせるというと、過去のものというマイナスイメージがあります。文化というのは、生活の財です。「財」に注目すれば、新たな価値の創造が生まれ、地域の財産に直結します。「観光」の語源は、「国の光を観る」ということにあります。そこに注目したいと思っています。光を発するのはそこに住んでいる人です。生活基盤を大事にしようということでまちづくりに取り組んでいます。

では、古い町並みや五平餅等の見慣れたものに光はあるのでしょうか。地域の生活文化の魅力がまちづくりの魅力になると思います。足助は、高齢化率30%、限界集落です。台風の影響で土砂崩れが起き、ひとつの集落がなくなりました。一方で、都市は肥大化しています。古い町に住み続けるには、どうしたらいいのでしょうか。

地域の魅力とは、ほかと比較して何が違うか、そこに何があるか、独自性だと考えます。豊田市は金沢市と観光交流都市の提携を結んでいます。たとえば、まんじゅうについて考えると、どちらのまんじゅうがうまいように見えるのでしょうか。車だったらどうでしょうか。五平餅だったら、住む町だったらいかがでしょうか。そして、それは何故でしょうか。

◆◆ 一幅の掛け軸にも物語あり ◆◆

この人物は誰か、ご存知ですか（会場から「信長」という声）。

そうですね。では、どこにこの絵はあるかご存知ですか。豊田市の長興寺（ちょうこうじ）という臨済宗の寺院にあります。

長興寺は永禄10年（1567年）に、余りの偉容に城と間違えた織田信長の兵火によって焼失しました。天正11年（1583年）信長の家臣で衣城代の余語正勝が、再興した長興寺で信長の一周忌法要を



行った際に、狩野元秀筆の「紙本著色織田信長像」（重要文化財）が寄進されたそうです。歴史の教科書にも掲載されている絵です。これは実は掛け軸



で、上下に文字が書いてあります。物語が一枚の絵の中にはあります。すべてのものには物語があります。活かさないともったいないと思います。

◆◆ 一本の五平餅にも山河あり ◆◆

五平餅には、いろんな形があります。たくさんお店もあります。お米がどこで採れたのか、味噌を誰が作ったのか。各店ごとに、しょうが、ごま、ねぎなどをタレに入れる等の工夫をしています。串（ほせ）に地元の間伐材を使っているものもあり、そのひとつひとつに物語があります。その五平餅の向こうにふるさどが見えます。餅とは言いますが、材料はもち米ではありません。食から地域を考えることができます。

分布圏は、尾張（愛知県西部）の北東部、三河（愛知県東部）の山間部中心、信州（長野県）の南部の伊那谷中心、美濃・飛騨（岐阜県）の三河・信州縁辺部中心に限られています。

五平餅の道は、塩の道、中馬街道と重なっています。天竜川流域、矢作川流域では、荷物を人と馬で運んでいました。その街道沿いに、五平餅の分布地図が一致します。長野県は、松本、塩尻で分かれます。塩尻までは五平餅で、松本以北はおやきです。豊田市は塩の道の中心に位置します。私は、五平餅は豊田の山の中で生まれたと考えています。

五平餅の起源については、「山の講」のお供え説が有力です。その他にも、林業従事者のお弁当説、「五平さん」考案説などがあります。

形は、御幣形、わらじ形、丸形・団子形・棒形などいろいろです。味も、味噌、たまり、しょうゆ、ごま、しょうが、ねぎなど、地域の食材を利用しています。さまざまな魅力をつめた郷土食が五平餅です。地域の暮らしを反映しています。

◆◆ 足助の町並保存 ◆◆

2005年に、足助町は豊田市に編入されました。足助の町並みは豊田市の資産になる、すごいと思いました。下水整備、電柱の地中化をすることになり、これはまずい、町並みが潰れると心配になりました。水まわりが変わると、古い家屋は壊される可能性が高くなります。町並み保存をしないといけないと思いました。「いまさら何を」と怒られましたが、町のみなさんの仲間に入れてもらって、始めたのが町並み保存の活動です。6月20日に、重要伝統的建造物群保存地区（略：重伝建地区）の

選定を受けました。重要伝統的建造物群保存地区とは、市町村が条例等により決定した「伝統的建造物群保存地区」のうち日本の文化財保護法第144条の規定に基づき、特に価値が高いものとして国（文部科学大臣）が選定したものです。足助の町は、家屋が密集しています。この中で400軒の世帯があり、約1000人が住んでいます。東西距離が約2キロ、幅が400～500m、面積は21.5haです。



第2分科会

江戸時代後半の絵と見ると、現在とほぼ変わりありません。安永4年（1775年）に、大火がありました。現存の建物は、それ以後の建物です。木造建築に前だけ張り付けたものもあります。カフェもあり、銭湯も何軒もありました。お茶問屋から石油屋へ替わったところもあります。宿屋、銀行もあり、警察署は現在、商工会になっています。街道が東西に通る、山側と川側に直行する道を小路（こうじ）と呼びます。中でも有名なのはマンリン小路です。小路は入り口左側の角の屋号をとって名付けられています。屋号が万屋（よろずや）さんで、当主は代々林右衛門（りんえもん）を名乗ったことから「マンリン」という名がつけられました。足助町を貫く街道のなかでも黒い板壁と白い漆喰のコントラストがもっと

***基調講演の後、以下の3つの分科会に分かれて、報告を聞き、交流を深めました。**

第1分科会「森林を守る取り組み・環境を守る農漁業・コープの森づくり」

報告者 高橋 啓さん
彦坂佐知雄さん（コープあいち執行役員）

2 「とよた五平餅学会とものづくり・足助の町並保存」

報告者 天野博之 さん
野田清衛さん（野田味噌商店社長）

3 「エネルギー問題と私たちの暮らし」

報告者 徳升孝司 さん（東海コープ事業連合常務理事）
高橋 正 さん（地域と協同の研究センター顧問）



オプション企画では、足助に足を伸ばし、夜のバーベキューでは五平餅を堪能しました。宿では、井関道夫先生のサロン（原発に関する学習会）も開催されました。翌日、三州足助屋敷を見学し、足助の町並を天野さんにご案内いただきながら散策しました。土地の所有者、建物の所有者がバラバラで、困難も多い中、重要伝統的建造物群保存地区の選定を目指して、ほとんどの住民の方と話をしてきたと天野さんは言われました。塩の道をたどりながら、足助

の町に懐かしい日本を感じた一日でした。

懇談会でも回を重ねてあちこちを巡っていますが、三河と一口で言っても結構広くて、知らないことが多いということを参加者一同実感したオプション企画でした。座学後のフィールドワークという運営は今年が3回目です。自分の足で歩き、目で確かめることの大切さも改めて実感することができました。新たな発見と学び・気づきが、暮らしのちょっとした変化を生むのではないのでしょうか。身近な環境、三河地域の環境問題や歴史や文化を学ぶことを通して、震災後の日本のありようまで考えるきっかけになったのではないかと実行委員会では振り返りをしました。ご参加いただいたみなさんに、あらためて感謝申し上げます。

（文責：伊藤小友美）

も美しい小路です。平坦ではない高低差を利用して家が建っていて、立体的な町並みであるのが特徴です。石垣は、昔の人が個人で積みました。街道沿い、裏通り、小路、川並みの景観はそれぞれ違い、新町、田町、西町、本町、それぞれ町ごとの特徴もあります。個性豊かな建築物も多く、足助の町は、山に囲まれていて、自然との一体感もあります。

◆◆ これからのまちづくり ◆◆

町並を保存するだけでなく、これからも住み続けて使い続ける町であることが大切だと思います。この8月6日に、重伝建地区の選定を受けた記念のシンポジウムを開催し、町の衆と考えた「まちづくり宣言」を表明しました。前文には「足助固有の歴史と文化によって裏打ちされた品格を保ち続け、将来にわたって魅力あるまちであり続けるために、今後私たち自身が実現していくまちづくりの方向性を、ここに集った人たちとともに確認します。」とあり、1. 足助の魅力を住み継ぐまちづくり、2. 足助を誇る人を育てる町づくり、3. 「お祭り」が似合うまちづくり、4. 交流を楽しむまちづくり、5. 新しい価値を創造するまちづくりの5点を高らかに謳いました。

地域の価値観が問われているいま、大事なのは、住民、企業、行政すべての意識です。誰がどう関わるか、どう意識を持つかです。住民主体でこそまちづくりはできる、まちづくりは、人がすべてだと思っています。



第3分科会



マンリン小路

環境パネル発

「東山の森に学ぶ」企画 報告

「東山の森」を散策し、里山保全活動を体験してきました！！

環境パネル世話人会として、初めての3生協組合員に呼びかけてのフィールドワーク企画を10月16日（日）名古屋・東山の森で開催しました。オプション企画は東山動物園見学でした。コープあいち組合員の2組、コープみえ組合員5組の親子、ご夫婦、環境パネル世話人など、子供を含め総計28名の参加がありました。

幸い天候にも恵まれ、秋の一日、自然観察と作業、動物園見学の内容の濃い企画となりました。参加者からは、「名古屋に大きな森があることを改めて知った。散策はとても気持ち良かった。」「今の季節でしか見られない草木や虫など見ることが出来てよかった。」「子供も参加でき、楽しかったようです。自然に触れることが減っているのでまた企画してほしい。」などの感想が寄せられました。子ども達からも「そばはあんな三角のちやいろなからがでできるとは思いませんでした。」「ぼくがしつもんしたらやさしくこたえてくれました。またきたいです。」などの感想が寄せられました。



- ◆10:00 里山の家、自然観察・散策
→案内・「東山森づくりの会」の滝川さん
- ◆11:00 里山保全活動
→平和公園里山班の指導のもと、鎌で下草刈り
- ◆12:00 終了 昼食
オプション企画＝午後企画（自由参加）
13:30～東山動物園 動物 ガイド学習コース

オプション企画の動物園見学は、コープあいちも協賛している秋まつり開催中で、入園料無料の上、さまざまな企画が実施されていて好評でした。



螳螂（カマキリ）の話に興味津々



そばの畑で、そばの花と実を見学



栗の木畑の下草刈り

パネル世話人会では、「子供たちの参加がたくさんあり、よい学びができた。里山保全の体験もできて良かった。3生協の企画として今度はぎふやみえでも開催できるとよい。協賛しあって各生協の取り組み紹介しあいながら、年間通じた取り組みにしていきたい。」とまとめをしました。（文責：鈴木隆司）

食と農パネル発

「そば体験」続報 そば刈り、脱穀、粉挽きをしました！！

ニュース98号でご紹介した「そば体験」の続報です。

11月29日（火）参加者10人で農場に行き、そばの収穫をしました。9月20日の台風による庄内川の氾濫により、1メートル以上冠水してしまったそばです。奇跡的にそばは負けず生き残りました。野田さんとお仲間の浅沼さんによる指導を受けて刈り取り、ハザがけできました。

12月15日（木）には昔ながらの足踏み脱穀機で、茎のたけが短いので手を引き込まないように注意して交代しながら脱穀しました。その後選別し、粉挽きをし、ふるいにかけて、1.3kgのそば粉が収穫できました。23日に「そば打ち」をします。農作物は自然の影響を受けるということは分かっていたつもりでしたが、実際に災害に遭い、農業の難しさを知る貴重な体験をすることができました。（文責：鈴木隆司）



INDEX

巻頭言	私が「友愛と協同社会」を展望できなかったのは何故か	野原 敏雄	1-3
	三河の地域からくらしを考える		4-7
	環境パネル発「東山の森に学ぶ」		8
	食と農パネル発「そば体験」続報		8

2011年 12月25日(偶数月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 川崎直巳

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>